農業自得 下

農商務省圖書
第共號冊

太政官文庫
和書門
類號函架冊
八三八
三一九二

内閣文庫
和
八三八
函
三一
架
冊

内閣文庫
番號 和 8383
冊數 2 (2)
函號 183 82

国立公文書館
National Archives of Japan

農業自得巻下

下野國河内郡蒲生村
田村仁左衛門吉茂著

大麦

○麦は米に次ぎて農家の第一なる穀物也。依て仕附収納肝要たり。元秋の末冬に至て霜雪の寒暖の差違おそれ有るの。実あたるものなり。又麦畑里も亦ども。寒暖実あしく秋冬霜雪実らざるもおそれ有り。

まはしきれぬ故なるべし。播磨の国。信州知恵
信原郡などに等しきものと。是又なるべし。
仙台領は市を遠し。時雨もうんぬ。為三年の
みのりを。終を成し

○麦苗の良晴天続き地かたまりたる年は。稀て十
日間位。十日間も。日間もとゝまる年は。根の収納豊
熟なるべし。雨降は根多く出て。麦を多く取出
加也。苗を雨降りて。かゝる年からとても。
苗を遠くの方を。根多く苗成り

生を早くして。根多く出て細く生を成り。麦
年の収納多熟なりと。なるべし。雑をおしものがく
ゝ。移を厚くしてのゝるべし。だねをれは初
ゝ。第らゝ強成りて。強ゝ多く出るも成り。
原実ゝ又種知て南風にて雨降は。稲の内に
移ゝ。くり付ものなり。是も苗成は強ゝ。麦
ゝ。さのゝ出る年。さのゝ出る年。又播方
強ゝ。実りて収納時ゝ。強ゝ成りて。のるべし。
を苗ゝこゝを対日を植り。面上て来ゝ

かたさ平坦のゆる程ハ。鍬庭掘ひ並べて。又収納
小屋もよりよきを作りてかーの。西方も
田畑より高き積の方を。上へ一番高ひ。
高きをけハ日陰となりて。さのミ日の当ル所
おこさ所。打とるゝ。しかして。序時の日うけを。人金を
かしも平原。平ハ大麦小麦とも皆一番高ひ
小麦高より。横小積して。ハ中ハ横ハ平なる
平原ハ。ハ中ハ横ハ平なる
○麦ハ田畑ともに地を。平に作る。

仍る深く耕ハ。平地ハ畝ハ高く。畝間ハ
高く。中日金も高く耕。畝間ハ高く
牛馬をのく数度ん。かゝて。ふみ付て。地をこなす
なり。苅てのあとも。能く踏べし。かくきり
ものハ。漑く出種。数へんと。重く
の苅取より。又七月も。能く。苅仕方を記す

大麦積子割合

○大麦一斗の粒数。上方の積り。見上て粒数の
上面歩分。横三尺長六尺の積り

日本民藝館蔵

此表数二十二本の穂より
壹本宮一株ずつ
壹株分十又穂の穂のこと
壹表分ハ宮ハ千穂
壹畝歩ハ九千九百穂余
此外同ハ宮七万七百
壹反歩分
壹畝歩ハ宮ハ合七万余
惣一株ハ穂ハ穂を減じ

古穂ハ一反ハ宮ハ一株ひとかぶりハ千穂穂先を茅穂
ずつ麦穂と稗穂の宮古ハ宮ハ高ハ
ら穂ハ麦ハ稗穂ハ
地穂ハ宮ハ穂ハ宮ハ合ハ宮ハ穂ハ
穂十ハ宮ハ穂ハ宮ハ
穂ハ宮ハ穂ハ宮ハ
穂ハ宮ハ穂ハ宮ハ
穂

次第あて。多く実り。豊国も多く大麦を有掛
麦不上げて。七年位あるものなり。苗を新るより。
掛減り多き麦あり。苗を能くえらみ作りべし。
○肥培の物手厚く油粕糠の高上の品なれども。一味よ
て。紙かし。二三味合せて。地に応ずる肥を
を。よく減て用ひべし。よくの作れよく育れ
ども。上こいと用ひざるとび者也。ゆゑ用ふ
れば悪く実りよし。よくよくあらとこいるれ
ば。実りなし。豊年なれば。実なおよく作て。こい

のを用ふるを称す。かく減分一ぱり。下の土地にも
よ肥ずして。こえを用ひて。掛麦を合る首
掛麦を合あるは。古えを入て種子を
らく方と収納方よく考る。作る地のよがるあ
らば。上々の土地。味ひよく有実も第一完全
くもち地の能きり。又よくよくふかりとこえをする。
地あて実りる穀物は味ひおるものなり。能く
考て用ひ
○大麦小麦一度あるえんをくふ定年限りと。

以人ひとしなみ。二月じゅんやで。支かほり
あえを。国枝人。麦の芽葉成て。いとも実り
ひろ。掘り。かるあえ麦の葉。抜ら
蒔ぬ。国少麦。国多ふあるぐる抜ぬ。国
ふるを上ものも人。昔も耕作も。ほとの小豆
取り。沙理を考て。こえを用ふ麦。あえ
のもの。こえの修ひよ。紙を通りんを。面で用て
○むけやと見ひたぶる書也。麦方小麦ふ多ふる
なり。移ふ小麦の刈べ。今年麦。松二百里

く。蔵て。芽れて。麦ふ。実のり
おもり。蒔て。九合あり。新ふく
ふ。餅あるふ。良麦ちぶ。ふ中てを。
で。重くあり。ひ。ひりあもあ。晩も
まり。ふ。稲こ。作ひ。大麦
出麦。三月日。作のふ。蒔て。実ひ。ひる作
ふれども。おもく。前ふ。移ふを。蔵も。麦ふ。時
まりて。年ふ。ひ。ひの。ひ。ひる
麦も。べ。ば。日。麦ふ。年。稲。稲ば。

麦種撰分

○麦穂揃くして。粒数多く粒の形ち形る意白き紙を敷きて。中熟なる麦を見るに能くうるものゝ。粒多くみのりあるものなり。よき種を二三合。又多く作る人わけを合えゝみて。芽けで或は余も萌出ざるもを一種にえゝみ分ち。翌年播き出す。此種は翌年、実りをよく。又は翌年同じ前の通りえゝこゝ萌ゝ。麦の穂より種へ細く長くして粒も細長く

毛はなきもの粒こまかく出来れば麦一升播て。翌年五合位あり。又麦種は年ふる程よし。

○らてれたるものゝ。能く識て撰むべし

○関東宮崎のお茶の花一畝上畑に作ふよりて。麦を花余有。夏より後に麦ゝ。七八年位迄減る事なし。其麦を麦蒔き通り蒔き時と。おそと。なれば。粒の。ちらし方と作る人のよりはのふるに仕ねよき民なり

根切の法は汲め置き糞尿を加へ置き河原石を
取あつめたねあり少れば石ばかりいもんや
せいさの養の根元多し大穀の種子を藁敷きて
自らの損失を補ふ天の冥加なりと自然と
清潔を尊ぶ所なり

小麦

○小麦は春秋共に出来るものゆえその法
小麦は多く作る仕附方大麦に加へ
なし。土地に適するを好むゆえ知恵ひさの容

れば及び氏に大麦ふかるる事所むね
に適らしてよし。春秋共に作して耐さて
○風に倒るゝ作物の刈合を花す

小麦種子割合

○小麦一升に付百粒の種子
畝巾歩下　畝三丈六尺
横三尺の種子
沙汰数九千粒也
畝巾一間ありて

一稗一升。拾八種の稗り
壹斗五升。四百八十種の稗り
壹斗四升。九千九百種の稗り
合計。壹合八勺九才の稗

壹反歩の種

壹升。八合九才の稗

○種子の撰方八種類の稗数多く蒔くべし。
ひえつ。穂長く稗多く遠く生
なる。實り稗そ行き。色皆熟ふ。穂實

ゆく。稗そ。
作り。小麦。蕎麦の外。下肥。醤油。菓子
類。小豆。粟の外。農家の夫食。米の替
りなる。麦。蕎麦。豆類。時れば。豆腐。麦の
粉。餅。作り。夫食。稗。稗。
失あり。又麦。粟。おし。熟。大麦。うす。
して。畑。おく。麦。稗。のさりけり。奴
網。おもて。麦。稗。教。授けて。作。製
しそ。よ。ゆく。作。新米。麦。

溫飩候ハヾ。製せるハ。年の十月ハ
ひう毒薄し。溫飩ハ長く。用ル所
ら年。石麦の食物ハ。能く成ル

稗を貯ル方

○大麦小麦をもて。よく乾かしめ。
袋に入れ。稗を俵の中に入れ。紙の
初陽に収納して。大陽の日を俵の
ひ筆を俵て。中を生ず。陰陽和合の理也。
俵の中へ水の風入らざる様に。

陰陽和合をもて。百一也。俵に古用手をも
ハ。落ちを便り。稗を夫食穀に時天和
ハ。又古用を。ちもの。又年て。貯ル
年方収納時。古用中。古用を。大麦の
年。年ハ。蕃を俵に。事を蕃
ハ。年を。古用年を。ひ。出ず。
稗を者を通。年せハ。永く。

大小豆

○大豆は古地にても好むなれども、殊に荒地にきらう。荒地にて、古くたがやしたる所にいとよく育ち、春はじめより夏の土用二四十日前迄、苅て実り有り。夏秋は郷り易き作物なり。苅て、ゴ。実一粒苅入れて、ゴ。実一粒苅入れて、ゴ。実り悪き場所にては、実のりも悪く、作り方、実のりも、作り方の類の図こと、実入後さて生養の上教ちれば、田畑のこと不変る事無

粟

○粟は、一名、黄地にても、黄地にても、黄地にても

生く苅ばらば。ろ〳〵方ハ苅ざのりよう。なかなか
より。二十日位とふろ〳〵。収納を能く熟する
を百姓もの〳〵

稗

○稗ハ其年〳〵熟する類を取て。翌年ハ
作らず。翌年稗ハ八十八夜ゆふ苗代を拵ひ
苗成仕立植る。実のりもよく。
大麦の熟する前ハ植れハ麦よりハ大き
み豆あり。苗の仕立方ハ畦歩六尺一坪一稗

種子同方ハ又同方。ほあの色同方ハ数ぬれ
拵る。白き物を入て平苅ばら〳〵。中て稗も
同時に苗。苗七八寸ハ生ぬりたる。ところをぬく。
一畦一反ハ畦ハ地ならべ。秋の大
麦を苅ばらひ。ぬこと。一反ハ一
株間一株稗。言年作て植ぬる。根の
方にハ一古をけ。根の方ばら一畦畠ばら。
多ハ能く苅ばより。苅ばより稗ハ
ら也。四地ハ二年。粟畠植ぬる年。也

田地荒廃を強くきらひて。蒔種せざるさのみ
えを用ひずして。実りなきあり。此
稲は雑草を用ひて栗稗たとへ花
あれども。あり意所にとて。花ら
百姓は強く作るべし。一反ト身稗
位とハ。実所育て。意あり
作り人も悪しき人ハ。実を減じ
一反ト稲意の。理を考へ作るべ
栗稗なり。干て病をべ数千年おくせかたら

ば。飢饉又色々の。時のそなへ不容易の事

荏

○荏は上州にも作るも。作るものあれども。古地に成
多き里をよろこぶ。四地荒ハ。五年ニ
まあ。絲論をいもなり。あるハ干くをおし。用ひ
まハ。清水に。川に。ひたるを。仕立屋
苗の仕方。荏の苗を。一株一株まき
代を植ひ。荏の用方。
苗を。一株ト。一株ニ。植

撰しの方は一反七八寸位にして。一番早き中稲
種。一畝に付五合宛種蒔方とれば苗代ごとに
一畝植うる。苗代の仕方は豆腐殻に灰を混ぜ
かくして。豆ある方を用ひべし

胡麻

○おそき苗代は。六月終に入て。苗初めまんげ
ともよし。晩たる七八年。苗代種蒔方長
こえ干の醤油粕を用ひてよし。四月晩種よ
くもみ。仮り時分のこえを用ひべし。

成るなり。仮り荏胡麻ともに種を蒔き苗
さこえを多く用ひべし。実を採り

里芋

○芋は食の助なる美味なれば植ゑまを
多く作るべし。里芋は小芋に勝れり。
芋は肥を多く用ひ。又穴の深さ九寸余
有べし。種芋の解方は先芋殻の
なる。芋殻は色かり。又芋殻の多
おを植く。

見合あり。はなはだ宜しからず。次に
小豆。ささげ。ささげ。移すべし。畑に播種
この外もろもろの川辺畑の水あるべきを。よく
ほどこすべし。馬の数多くあらば。植ゑ
ずして。二月中
より。八十八夜迄。
畑に播種。用ひもちゆべし。生育の後。
を用ゆべし。四月中旬。おくれば。
年もいまだ稗。蕎麦。植ゑ。三月中も可
植ゑ。新年。
けて植ゑ。新年の稗。稗ひえ
宜しからず。かのめく。植ゑれば
かれ年。
あらば。深く耕し。又大麦の中へ植ゑる時は前年
より。掛豆二畝植ゑ。一畝あけて。植ゑ大和
薯と云。是大豆あり。麦の畝間に異
つゝ。続く。秋の彼岸
は。朝夕。
小。茅。売。

収納の時に茅売茅さうなること能くかきて時分
所網めに附る。茅に所ひ方ふ軍〻らにて
いつも。終一の為ふハ古多く付ちゐど。よき方
ふ茅試一通りあり。屋重ちを一鼎入。又茅を入
かくのごとく茅を敷て能く合せ重ね。ゑ中め
もまど。宮ゑ茅ふいてもす。茅ハ徒ら多き所ふ
きべ念ころふを入しそ。俗ごゝふ出来れば
殺ゑもふ俗ふる。能く彦潔ゑゞ

甘薯

○さけまつもハ徒ら多し。稚子日本一ハ
たれる事。ゑ正ゑ所ふ俗ふ方をもて四国〻里
く多し。野外多に渡りしる。寛政の初に所ふ
俗ふ方。近頃市も漸〻俗ふ方能く方を覚え
たりまいの仕方貯方の大略を記す
○苗代仕方ハ宮腰ふよりてお蚕あるものあれ
ば宮腰ゑ茅ゑげしたまに。小代の掛方ハ回〻源
さ七八すゞ天四方位四方〻ちをかりと中〻
半遇の数ふ。又ゑ麻の数ふ。麻茅ゑを

かり。干魃なるもの。仮令の如くも。二反ばかり。
もいれ。もしまた古き苗あるを。かゝせて。植き
又刈ぬるとゝ。いもの麻ゐを。植ゑて
一反余ばかりあるとて。植ゑ日らづ。又苗なれ
苗なれど。其の有合を双方より抑植き。
苗代の中程にうゑかゝるべし。一日に二反。
もを植て。作時の植よを試むべしあらう
植て。苗揃ひ次第植るわざ人らづ
を植して五日目植れば根葉を出す。蔓二三

すの時上の如くを。植りも。霜降時に霜除を
して。始終暖なる様に。生育良水
を時々注ぎこゝろいるべし。稲の又苗なり
ものせんで。付を葉に加らざるやうかけべし。水
蔓にても同様に。葉に加る時に流出水多
く注ぎ。四海の葉にあふかゝるもより生育
ても。代なして。苗の葉に時いものるく。濃蔓
を注ぎ。代あるまりて。まくさけるもの形。蔓
の彼岸に代に移を植。月もんげ前に植

で。九月麦ふ植れば。たね多くいれども色
りよく。実入まよく。麦下肥。稼ふ畑麦
肥。そんげ植二三番肥位の稼ふまつよりて。
大ふ多あり。植り十日も麦ふ蔓のしんを止め
つるをとりたる事を。二四ちうけて。ちりむい
もきの苦者近さ処ハ長く
切ち。茎多くつくるさたを一ねり出
して植ふ植べし。水ちうりのよう植て
深ハ二寸ふ及ぶ稼ふ肥ハこえを。

五寸ふけべし。畑題みて朝ち夕水を多く注
ちよう。畑ち所地ち所の事ふ地をよく注
ち。茎深地ち。茎長く節の出事ち地へ川ふ
入て。又朝ぬちふを入て。方より加さあげ。ち
茎を抑ひ。そよて植べし。土四方より強く去
味を考へ。工夫ち一也植て蔓ふ切ハ根を
切ち。ふ実ちらぬ。二四ち蔓を引ち
べし。中ちの実ち。一昨年九月ふ自位
作ち。ふ入ち地ふ入ち。又ち植ち用ち。ちる

もの形ちゆがみ方八秋の末この初め一番霜降時分ハ
霜降前後ハ能実入る時分なり。
毛日一日干て陰乾ス事ハ
の穴を堀り埋て置。又多く貯穴ハ中間
長さ二間程ハ
ち藁一。依て古の穴ハ穴の中へ
さ長柄を立ハ
たゆる。穴のそこ古藁
変ず方ハ通りのぞき
のさハ
ぬ藁ハ一通りあ
かゝ陰ハ
紀州ハ
ぬるを
ハ。
ハ
穴の
生ず
も
ち藁

ゆえば。六七月までに。穂へふくらむもの。蕎麦紀
を過り。晩稲を移むゆへ。晩稲の穂。ふくらむ
及ばず。大川筋の古地の砂質。強き故不苗
代簾米。そもそも生ずる所。陰気の場所。
代をかきくゝ掘ひ。代の中程たつてより方
ずつ。まんぢそて仕立代の方も。廻り通
一天平りのでき。平面のくいもを植べし。又
極窪田に重播。代を掘く植べし。平面
まんぢそて。作らハ仁の古地ハてもでき来へし。

生紙の宝暦を考へ。甚里くれ定法を定めた
まの形り○極くのくといもをたくいうもみて
よく掘さ。ちをを去ひ。ちをり形をぬの
みくこと。痛おいれ。重ちををうるを水を
深く。又ちを入を毎。又ちをを球をぶし。かく
ぬけ。数へんさらせば。よく蕾となる。たくく細
さ如くうとも。もて廻らば。もてうを球卵る
。天道の実形不中ちををや

岡穂

○おかだれ水溜ある畑より種子を蒔き水を掛け苗の成れば。手ぬぐいにて畑を畑にて畑の畑の畑の

あらら大略の所ハ四月中蒔付なり。
おそハ粉行ろよ。外の雑穀ハ遅く。
方れ。ちんけとふ方ハ
えんを。ぶぐもより。初ち月ハ
大きふ蒔あり。かくきりハ七度。
ちど。依ら毛ハ草ちり。
おふ紙ハ毛ハ。冷水ハ
あるすおり。四月ハ
あり。依ら絹糸ちり。

加ふ名産也。旦那年の宝中。雪ちく降る
ハ大方ハ豊なるべし。

大根

○大根ハ春年。秋大根を蒔て。冬
ちて。二月大根。夏大根。秋
大根。夏の中より蒔而あり。又ハ
夏。蒔あれ。冬の宝百ちと十日ハ
ちて。中ハ中ハ
ち。行てくちりおし。

ハ、そしらいぢら。世をうして高ぶり。おごれ
こゝろ。天皇家のちよう。ほくあこえ
を。深く慎こゝろ。屋こえ牛馬の数こえ多
し。但水濁れ。世を生ず。是陽気不陰気
を。かゝる所より。此死来る。陽気。ちりぞうこゝ来
ぬ。ほうえハ法ゆうて。是ちを陰ものゞ陰陽和合
て世をなる。理なり。花鳥日のあらぐるうちを。
法けバ。是ほくこゝもよう
○かぶら菜。是も荒年ハ。ほくあ作りて穀物の。

かてとなる。是ほくさおるう。種穀年。
能ほを。ほくみて。作るべし。蔬せうた。大
根より十月。ほくあ前ゞ。弓方、大根
ほうふ。ほくうう。ほくよう。ほくあ大根。
ほくあ。ほくうう。生ほ時。ほくあ
ハ。ほくあ。ほくあ。ほくあ入ほ。ほくて
ほくあ。ほくあ。ほくあ時。ほくあ
ほくあ。ほくあ。ほくあ。ほくあ。
ほくあ。ほくあ。ほくあ入。又ほくあ。
ほくあ。ほくあ。

さるべし

苦蕎子

○あるべし。山地・沢地・畑地・里の地・荒地・秋田用蕎麦。上蕎麦・下蕎麦・中蕎麦・信濃蕎麦・この種子を入て。畑にうゑ。荒こえ多く。あかり中。大まめ多かるべし。すべて。植付。うゑも。苗の仕立ハ。かぶ・まくわ・まくわ・ふまき・ふまき・ふまき・ふまき。植付ハ。宝永元年。なるべし。植付ハ。

麻

○麻の植付の地。山畑の地。荒地。麻地。畑地。田地。秋田。麻地。平地。ハ。蕎麦。麻。作る。大豆。を。植付ハ。畑ふ。作るの。麻こえ。ちから。深く。耕く。植ハ。大寸。水。て。麻。ハ。二月。中。より。

田村氏蔵

二月中のはじめ。苗代をこしらへ。俗
にいふ。ようの稙よ。四月合種蒔。こゝハ
他稙もとゝ。ちがひ。用ひ方ハ。少し
苗のこゝろ。はじめ。苗ふくまさとり。
生のやうにて。一二度稙ふ。あり。一度
まきふたゞび。是を釜の中ふ。いれ。ふ
しそとより。櫛をかぶせ。むして。ぼを。とる
べし。又長さ。ようさ。釜の
中へ。つるべ。上の方を。越ふく。ほく。ほく。

み。釜の中ふたて。釜の口を。ふさ
ようふさぐ。ぼまの。ぼ。ふこらく。火を
強く。たきて。ぼ。ぼ。ぼ。むして。ぼを
とるべし

種

○ほのぬれ。ものこゝろ。原。地。極く。益。
子二斗。そとるべし。こゝハ。稙。かおと。用て
よし。苗地。耕して。玄のひがんを。
べし。畦。苗代一畦。上。後。ふ。文貞。

蒔て。苗こえハ懐糞を。汚ぎ種を。
苗まきころ。ぬかの。ぬかて拵。水こえ。
度て。をて。長刈納め。八月後ぬのころ。
○花のこゆる時。天氣を見て。刈ふ
こと。五十ぐし。二番。中間ぬ。
あぐ。をの。ぬのれよりしたこと。
別のぬのの。ぬ。ぬ。ぬ。作り
なる。成。ぬ。ぬ。平。敷。年。試。
ぬ。ぬ。ぬ。作方。せ。ぬ。方。ぬ。く

紀。ぬ。作。和。ぬ。ぬ。ぬ。作。ぬ。ぬ。

麥菜

○麥ぬ。ぬ。八月。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
麥の。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。八日。ぬ
ぬ代。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

多く国ゆふ及び極てのち古のかさなる
ゆふ。法皇あを。変く法く屋。仏お前
れ花すゆく咲て。面白く

苏子

○なとと。稲を。半分熟たるを。とりこるふ
包み濡のうたを置。二月年の也
りぎく時ふり出し。法ひめ。かるか
して。前ぐ。代八日間。牛うのしさ犯
を。一天みちす。急て年ふ法けそと

ふ。古さしさこえを。おまたにして。二三寸を
て。濡こえをうけ。二三日干て又そとへ。なさん
きこえと。古と所を。いれ紙より。金て一寸
もを。馬ふんを。又を古さこえの細かるを。た
祢のえひかれふ。ふりけ。そとふ古ひ
ろるどを。けそ又きよふ。日らくどを。をく
ふさみて。おき。祢行。せくかけぐ
一日ふ二三度。つを入くこそ。かし
いあてうるる拾ふ。して生を。をうく。

ちゆくふるゝるゝ。すゝ生ゝ生くゝ風呂
ゆをゝのゝ。けてゝ。生ゝて雲ふ
らゝ。ゝをけ。ゝ麦ゝ根ゝ麦をゝく更せ。
至不せハたゝ。ゝ麦ゝ刈ゝ方れ
ゝゝて。ゝハ三すの麦ふ一本の別食
ゝゝ。ゝ生ゝ。ゝ根ゝ麦ゝ。ゝ刈ん。
ゝゝ。ゝ又九ゝ二枝ゝ麦
ゝゝ。ゝ。ゝ。

こえ玉を多く用ふべし。かくせハ多多り。
あるなり

煙草

○たゞこれ我里いまゝしくこゝ所ゝ云かゝ
し。四方の隙地あゝべ。麻の下ゝ地を
ゝり。麻ふ会をて。用ふもバうゝ。大隙よ
し。これ煙草の事あるゆゝなり。大抵
ゝんせう。いゝの事前さ思て。ゝゝた
だこれ出さ。笹の葉ゝふなり

なるたゞこれ用だゝとゝ所れを四歩一味噌
を作ゝ作ゝのゝ。汚げバ多ちゝ。
あるる事。きめゝなり

蕎麦

○前地ふゝ。又山根あゝ。焼畑ゝ
ゝゝ作あり。ゝの他ハ多ゝ作ゝ。
旦雲の逆逆ゝて。前せうを定め。近
ゝハ裏の。七月廿日位ゝまゝなり。
水を多ゝ作ふ。畑のかゝる焼前

田村蔵

べし。稗を庶民の糧とせざるべからず。こゝを
以て塩業あるものゝ。まゝ多く蔵れ来る所
多年。たゞ二合五勺より。五日目にて四合五勺
もゝ目にて。四合十日の目。三合蔵く。
○皆同日あるもあり。是をおくれ。まゝ
別紙合て。用ゆる法なり。仮令ば。
外れあるこゝを用ゆべし。又四月
より。七八月迄の室。前年あるべし。九月
より十二月迄。室八年あるべし。

あり。是等後よりして時代あるべし。実に多
し。室ふかきほどあるべし。年を実とすべし。

早稲晩稲の法

○早稲。晩稲多類塩ふるし。里おもり多く作る
ところあり。又時のところ合せ。田畑の法より
作る事あり。れくを多く作ることあり。又
をおくれの用心あるべし作る者あり。田毛、
ふ。実かし。晩稲。大ひふ毒あり。中
稲。晩稲。実多し。晩稲の年もさのく。

ふ熟せば。おくに成て。ほしあらたにぬるたけ。ぐんぜて。畑ものゝ。ふせふ。新ありものゝ。わ麦。稗。木綿。たうもろこしなどゝ。只りのたあふ作り。実ぞりめく。土地やせて。沈作ふがいあり。きびとまめ。おくに。出来ぬと。只りて。こんぶ。ふうろを。陳して。ふるふ。只りのたねに。なるものあり。元来もとりの。よりあり。秋上の。只りに。そを作るもあるとか。さるあれ。只りこの。ぐり方。よりけふ。

よりとんぶ。多ふ。貧乏百姓ゆふ。
馬ぬと。えを。実人を。ゆ。
り。昼。より。動一度。
四地。地。地は。作ふ作。毛け芸
又昼く。家より。略
一稲。稗。麦。を。作て。
一大麦。麦。稗。ひとく。より。年。作。バるを。
一粟。四地。六年。稗。もろこし。二年。

いもづる

一稗四地又六年。おうば。粟。きび。もろこし

ひえ。三年。いも

一大小豆大麥ゝ田畑ハ二年。ゑんどう

一荞田地ハ四年。おうば。あたね。きまあとこに

年いも

一胡麻。四地七八年。かかば。あをゝ。荏あとに

又年いも。きまゝ胡麻を。干たる跡。荏ばか

も。実のゝび

一木綿四地。さのゝ年。ちりあらこゝ多

くる年大根の跡いも

一蓑豆四地。さらふ実のゝび。七八年ハもか

ゝ花ハ形

一蚕豆ぶんごうの。毎年いも

一芋四地あゝ年。いも。おかば。きびもろこし。

あゝ。七八年いも。稗。そば。おゝ又年いも

一さつまいも。四地。さらば。千年。根。きさあ

一年もいも

一大根四月ハさのゝきらゝ。あゝ移ル。一年いむ。ゝ外ハ根なきゝ。あゝをいむ

一夕ゝ日。四月七八年いむ。ゝ外根なきゝいむ

一茄子四月。七八年いむ。大角豆ゝ。ゝ根なきゝ。

ものあゝいむ

此外冊子業のゝん行ゝゝ。四月ゝ根なきゝ。家

小紀さゝ。又ゝ月ゝ初のあゝハさのゝいまゝ。む

ゝゝゝおゝて。ゝ月のゝのあれハよゝ

紙むゝ

好地

一大麦ハあひ〳〵胡麻より

一大麦小麦の畦ハ大小豆より

一胡麻ハ小麦ぶゝより

一蕎麦ハあひ〳〵より

一芋ハ空地おゝ稗多ハあいゝより

一芋種ハあひ〳〵より仕ハ多く入べ

一剛綱地芋ハ〳〵ハあいより

一栗ハ〳〵ゝのあゝ大小豆より

田村蔵

一花本作あり。小麦より
一大豆あり。大麦より
一本作あり。小麦ふとうより
ちゝ通り。四地乃地を。えゝめぐこゝろか
しに用ゆゝ。多く用いたるふ。中又和ようり。
ゆえに多く。用ひても。実りあるもあり。
実のゝ無作。里ゝようりて。作ゝ無あり。
又ゆり作あり。これも四地乃地を。多く試て
作るゝ。旦年の年侯ゝ。ゝちさゝふ熟

する作物あり。先本作ごゝ。ゝちゝ栗ゝ。ゝ作家
ふ不熟つゝ。ふ作年ハ多く作ゝ。ゝ作家
年ハ。ふ蔵ふ豆年ゝ。作ゝ。ゝ。
豆の種作ゝ。さゝ。ゝて蔵種の法を。さゝむ
べゝ。ゝ。豊熟ふ。ゝ。ひて。大方四年を。
ふ熟ゝ。ゝ。ひて。ゝ。熟る新もあり。
新ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
作ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
技を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

日村氏蔵

きをうめればよくそだちて落るるなし。此外新田開墾等の新法なりとても稲とまくこと八月中旬の根刈たるを依く。稙子割合を記し。次に穀物の一助たらんための古歌を記し。後に蕎麦の種をいて。おしてきるべし。又開墾の業なるこの国の農民こそ。第一農業に精出すべ。新田開墾等の人々ことごとくよい。前に記したるなり。

ありとてもよくこなして。手間をかけ。肥をあるべき方を用ゆべし。和漢ともに。こなしたるよい。こなしこなしたる大麦をわざわざ耕作をもとめて。仮令より悪しき。稙子不ても。只年作ハ。其年作のみをもとめ。まきこなすべし。

麦の合方

○大麦小麦の稙子の入る所。まき所を出し。只りをうるく。かけ手間をかけ手間

うそうをつれ。移さるをのれ芝へ。淺蕎をく
○かけ。よく移さるこゝろをもつぶるゆゑ。ふかき
くさみをそこ方よりかきあけぬゝ庄けき
り西へ。又ふるをけかくのごゝく二四飯
ぬゝ新れば。おのづからわくゝ揚ふぢりて
西部を。ふあそこ三四度をりて。たねとこえ
とよくゝもり合色。たるを作のるひをそる
ひて蒔て。粟胡麻麻種を和行てくる。
西ゝ成るたねをいれ。蒔く庄れ前の西

ふゝくゝをけ。きりあつ。まりわくゝる。
西へ移をいれ新蕎麦。ぬゝひ
まそふひ蒔て。於今移さる麦をいれる庄
八半弱の麦こゝをきりて。豆開ゆる。
れども。蕎麦ゝ強くたねをくいれる麦り
切り西へ。をりふくゝられまを庄まを蒔べ
しゝ。麦二番こゝふ。開てり。麦ふ豆西り。
一撫へ仙の移し。麦を強めて西ふ。庄の合色
方ねんこゝろをて。作ゝ海櫛の弁へめか

ごとをいれ。まを伸ようくくだし。所を分せ
ず。さもなくて。かたとりて。ちまあり。きさ
ひこうこうとても。ちのめかごとをいれそうこ
ほうぐ用

稲穂収納の方

○稲穂。極熟くくる時。外り細めでし。いま
だ。まを粗のある時。収納とれば。一刎服の稲
あり。ゆら性をよくくとるあた。一刎寄の稲
なり。又ふくたる稲穂ちる稲

○日を更さる。脱穀まくし。こまを外とれば。
乾くし。俵でおをとる。十日寄も日
をを更れば実るるるうち。雨雪障りても。根
株外なるるさ。ざれば実りの妨
○穂ちぶれ。極熟をとり細ぶし
○大麦は。ふ外くを。ありといても。いまを
極のあるを外りて。ふ穂ふりよりく
稈をようくふみ。だいふあるまを外
○さうを。収納をぶし

○ふまをそだてさし。植たまあふ。収納をそ〻

○茅の苗はよく。熟するを附う。古年〻実

のる苗は熟たねかし。地をふこのるものを

まとりは植る。ちふ苗なり

○苗のもふ熟する方ふ徳あり。主行を考へ。

又風雨水旱おのゝ人もらいふ。ちりてとり

おそるべし

諸木植方

○移植を卯とも。秋実をとり。日向ふ苗代城

植へのこぎりくゞとを。木の実ふ生せて。まめ

彼岸ふ。まき。翌年。又ハ三年目ふ別の

ところへ。ぜをらら〻。一人堀一本の割合ふ

て立植をきりて。植替ざし。三種る中へ

木の葉ふ。又ハ産のをさためれ植を多く

いれく。葉ふふしてをバ。切植と〻多く

出て。植ずしゝ。枝をとりあ〻。代をとて

二三年目ふ。四月中より。二月中ふ。雨

ふりてほく。植をべろ中。一本も植るとう

やう。信濃もおなじ。彼岸過ぎより植ゑ。
又大和も一年おきの一方の根をきりこ
やしをして。四方四年おきに枝をきり分
代りて。植れば枝ながらの物。諸国ふ八十八
夜。雨降ふ植ゑ。されども霜りあり。
植ゑ年。此地人方も育をよくして。翌年
出蕾。花を植ゑ。新根伸年ハそ
をもつて。ちゑふ根入る。よくふ異れども。
陰陽和合して。天地の産を。

て生ず。一説に大陰ふして。陽能く出
ち中過ぎより人号家あたふ号陽気内。
かりて陰多外を包む陽あて陰のうて
実健なり。故ふ無る出ても枝ないの
ちを。係つて長ふ。此枝をとり
て。おのを財の。おのおのほ家内とも生活さ
故ふ。ハと植て。よきさるあれども。財いま
だ。陰陽和合の元なく。四月二月ちやや
陽盛ん内ちを。よりて陰を。根家ふ

さ本の苗ハ十月より植てよきなれども。寒
気ハ苗を痛ふいとも。寒ハ霜ふりて。
植ずして又八十八番より。八番の苗を
植ること。根付よきやうなれども。根付ふ
陽気ニなりしなれ。苗ハ方も有之事も
有之ものなり。植ふ苗も年ハ極寒国
ハ霜ふる時を。苗ハ植ずして
竹の植方
○から竹を。植ふ。あたゝかく新竹

を。あかぶふ。雑木を伐ること。二月中より
三月中まで。植てよし。なを三月も宜し。
まんをきりて。植るものなれども。あるべく。梅雨
ふ。なるのもよしあるべく。竹を切て。植おきを
きらぶ。植れば。繁りよし。よくこえを用
ふれば。成ふ。但細工ふ用ふる竹ハ。壌を
てハ。ふくかく。竹ハ。根ハ。ものの
古地のよしを。きゝ。ハ。植ふ。根ハ
さかふ。竹の中ハ。竹をいとも。植の本

もみの米ばかりもうハ拍の米のあるの義にて
毒なり。又数十年をへて。竹生ずかぬる所ハ。ばらばら代きべ。新義とちがひて。
ちゝ生じ又飛ばかりて。竹の形ハ実ばかりて。拾ひてもの実ハ
たる。然ばたゞ前年のバ生ずるを年をへて然
ばしたる。且多年ふる代ばの古ハ九十月ゝ。
あゝ所の義なるなれきり時ハ二月より
又六月まてふ新世を殺して。代ゝ又

虫の付たる所ハ。友の去風をてより。十一月
ゝ年ゝ。又ゝ所の拾方。代方ともよから
ばかりなるべ。この竹ハ拾米毒なり。
此二ハ。民家毒用のもの。大略なれ。
外竹も去国別ゝ。毒ゝ出ゝ多。
ハゝくはたべし

○農業全書ハ。一人耕して。拾人の拾持
ばかりの書置ゝ。尋ゝの作り方を

わ。蔓延して。よく茎葉の根株。紙網
得して。蔵に充せる上ふも。移植するもの
し。耕作をなさば。如何ぞ。易りうべし。
就て。数年実をなく。性よく数をなして。茎葉
畫掘て。ふる畫夫ふを。栗稗
わるもの。皆もうべし。蔓延ふ方うし。蔓延ふか
くの如く。ふる時わ。十人の技ある
べし。生一人の耕作。元数ふまして二
十二石。さもうべ。五十一石。外数ふ石合十六

石。一別もう増せ。二石
二斗場。増米も合せて。十八石二斗と。
是十人の技ありて。百姓が一代三年年。
耕せ。もう場の分。十年十石の差もり。
茎傳通過。穫八二別米。茎あ
るべし。自然代の。茎米る面うず。
て他の所ふ原はさ白。年年毎人魚
ふ変の。ひら年。城。死。茎米の。所た
らんもあり。徳人を書ものもいるも。

平らいの農業の。多き中おたとへ。一つの。
離鍬あるとも。一鍬一夕ゐ。色を那へ也ず。
ものを業の。未天理ふ。知らる鍬ある。
うまくを取て去地へ。業信へ。壊の利ひ名。
よりありの。取らし伐して。理那をたゞ
のうむ支を。常ふの〳〵

農業自得巻下

国立公文書館
National Archives of Japan